汲古一心

『仏蹟めぐり膝栗毛』(四)

中村素堂

鶏がやっぱりコケコッコーと鳴く。鳶がピーヒョロヒョロと鳴く。国際的共通な発音である。人類だけにある言語の不自由さなどを考えているうちに、電車の音がし始め夜が明けている。ゆうべの毛布もそうだが、今朝の茶もそうで、頼んでもなかなか来ない。あきらめて出かけることにし今日からシャツ一枚の軽装にする。

窓外は鳥の声、椰子の木の影など、朝の歩道を歩いてスペンセス・ホテルへ帰り、日程を協議し、また大菩提会招待会へのメッセージなども決めて、のろのろのろのろスロー朝食を喫しおわると十時、やっと車を列ねて街の見物に飛び出す。

カルカッタ街頭に見たもの。それは貧しい人々の町、部落、放心したように街角や軒下に佇んでいる青年、汚れた衣服で無目的みたいに歩いているベトナムの難民、人道に座って何か話し、食べものをとっている人々、頭に大きな荷をのせてはだしで歩いてゆく男女、痩せた老牛の群。

一方に別世界のような鉄柵いかめしい石造建築、広い公園広場、ラマの大伽藍等々、まだインドは健全な独立国となるには少し時間がいると感じる。

路傍の牛の寝ている中に車を走らせる。その牛の糞をホットケーキのように平たくして、塀でも壁でもまた立木の幹にでも貼り付けて乾かしている。そしてこの大都市の木かげや路わきでは所々に白い服の男が静かにしゃがみこんで大小便の用を足している。その異臭のただよう路地を曲がりつつ五台の車を列ねて最初に訪れたのは、インドの実業家や富裕な人々の信仰によって永く栄えてきたジャイナ教の夢のように華麗な寺院である。門から殿堂、歩行路、池亭、ことごとくモザイクで、大理石、色美しい石、陶磁器の小片を極彩色の唐草風にちりばめて、石の階段、石の椅子などもともに濃厚な色彩には眼が疲れる思いである。

小庭園風の芝生の中には日本の菊が、大輪、小輪これまたけんらんと咲いている。園内を廻って本殿に入る。殿内もまたこれでもかこれでもかというようなあくどい色彩の中で、南窓にはめたコバルト色のガラスを透して、強い日光が眼に沁みるような藍色を真白な大理石の床に映していたのは忘れがたい強い印象であった。

香の匂う殿内を辞して階を下ると、その左右の亭の中に象に騎った武神像、馬に騎った武神像のようなものがあり、そのかげで鼠の死骸を烏に似た小鳥が啄んでいたこと、モザイクの陶磁器の中に「寿」の字を染めた日本陶器の小片のあったことが、なぜか鮮やかに記憶のすみに残っている。この寺の周囲にはいくつかの末寺、塔頭のような寺があり、これはそんなに絢爛としてもいないが本寺よりも豪壮であり、殿堂の頂きに高く法幢を翻していたことは仏典にも類型のことがあるので、インドの宗教共通のこの誇らしげな慣習をたのしく見てきた。

ここを出て、またしばらく走って、仏教徒にはなつかしいガンジス河の河畔に出て、ヒンズー教の太寺院に着く、入口辺リの土産物屋で、昨夜われわれが首にかけてもらったレイのような花輪をいくつも売っていた。畳の藺みたいな草でいい加減に綴じてあるその花が、次から次へと抜け落ちるのに困ったゆうべの経験から今日は手をふれるのもおそれ、遠く見て寺域に入ると、いるわいるわ、老若男女の物乞いの群れ、それに靴みがき、花輪売り、奈良の鹿のように蝟集してきて取りまかれるのに逃げ腰で殿内拝見を敬遠しガンジス河畔の水浴場の階段へ出る。牛の糞を壁に貼ってある家、竹で屋根を葺いている家などもあるが、広々としたガンジス河は黄褐色の汚れた水を満々とたたえ、二、三の船が上下している。向こう岸は英国風の工場らしいものも見えて、淀川か隅田川のような感じの下流には、大きな鉄道の橋梁が見え、汽笛をならし煙をなびかせて貨物列車が通りすぎていった。明治の終わりころの風景を見るような錯覚も起こるが、ウカウカしているとまた物乞い群の包囲に陥るおそれもあるので、境内にいた真紅の野鳥なども横目でチラリ見て逃げるように裏の方の路から車に乗って、この寺を退出する。気温三十度にちかい暖かさ、これが暮れの二十三日なのであるからチト驚かされる。

(つづく)

〈『仏教書道』、昭和四十一年〉